

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

大町高等学校

飯田高校 杉山昭久先生寄稿 山岳班夏合宿① (8/4~8/9 : 4泊5日)

南ア北部縦走(三伏―塩見―農鳥―北岳―大河原)

農鳥小屋の「名物父ちゃん」は厳しくも優しくった

(1日目：鳥倉登山口～三伏峠露营地) この一週間、天候は安定し、この後も晴れが続くという。ここ、伊那大島駅には何人かの一般登山客が集まっている。火曜日ということもあり混雑は見られない。鳥倉登山口へ向かうバスを待っている。ひょっとしたらということもあり、事前にバスの増便をお願いしていたので、我々13名(男子生徒9名・女子生徒1名・顧問3名)は余裕をもって乗り込むことができた。(6 : 45発)

大鹿大河原から、確実に高度を上げていく。登山口手前の駐車場には県外からの登山客の車が15・6台並んでいる。ここは土日といえば、駐車スペースが無くなるほどだが。バスはゲートからさらに3キロほどの登山口まで進む。登山口には10名ほどの下山した登山者がこのバスを待っていた。身支度を整え、9 : 00丁度に出発。途中、小河内岳がくっきり、青い空に映えて仰げる。

11 : 50塩川からの分岐着。塩川からの直登コースは、かつて三伏峠へ向かう主要な登山道であったが、鳥倉からの登山道が整備され、今では廃道化としている状況だ。自分も岡谷南時代、何度か塩川から直登して三伏へ入った。途中にある水場は、岩の割れ目から冷たい水が流れ落ち、それは、それはうまかった。今でも思いだされる。

12 : 30小屋着。湿った空気が列島に流れ込んでいることもあり、ガスに包まれ塩見は見えない。何年か前から小屋番をしている飯田山岳会のAさんや、飯田高校のバド班のコーチを15年もし、何年か前から小屋番をしているという松川町出身の北原さんが、差し入れを持って挨拶に来てくれた。今日は空いているという。

3時過ぎ、雷鳴と共にすざましい雨。顧問3名のうち女性顧問の小林先生は、今回の合宿はすべて小屋素泊まり。三伏小屋の離れ小屋は今シーズンより改装し、個室・トイレ付のビップルーム。小屋のはからいで、明日早立ちということもあり、このビップルームを提供してくれた。このビップルームで3人はお茶タイム。1時間ほどでこの雨もやみ、三伏山の背後に塩見岳がくっきりと姿を現した。水汲みを兼ねて、日本で一番高い峠・三伏峠のお花畑へ。かつてこのお花畑は見事なまでに色とりどりの高山植物におおわれていたが、この地も鹿害にあい、かつてのようなお花畑の姿はない。それでも防護網の設置でその内側だけは復活が見られる。今年はずでに夏の花は終わり、秋の花の代表であるマツムシソウの紫の可憐な花で埋め尽くされていた。ウメバチソウも見られる。お花畑の上部から、昨年、風雨の中、歩いた荒川・赤石・ウサギ・聖岳方面を感慨深げに眺めた。

水場は、三伏山の巻き道の中にあり、烏帽子岳中



腹よりホースで引いてきている。この下方に三伏小屋がかつて位置していた。20数年くらい前までは、この沢沿いに数多くのテントが張られ、多くの登山者でにぎわっていた。今は小屋もなく、塩見方面は、三伏山経由でしか行かれない。明日は午前3時発。早めの夕食を終え、シュラフにもぐりこんだ。

(2日目：三伏～塩見岳～熊ノ平露营地) 午前3時、予定通り三伏露营地を出発。今日は今回の合宿で、一番の長い行程。ヘッドランプでの行動は昨年経験済みで、これもまたなかなかのもの。見上げれば空一面星空。半分ほどかけた月が我々を照らしている。三伏山山頂からは、はるか下、大鹿村鹿塩の集落の明かりがぼつん、ぼつんと浮かんでいるのが見える。



4：20分本谷山着。五右衛門山を巻きながら2410mの開かれた平坦地で休憩。三伏方面が徐々に遠くに。最低鞍部から徐々にまた、高度を上げていく。20分ほど登ると視界が一気に開ける。生徒全員から歓声があがる。遠く北アルプス・八ヶ岳、眼前に中央・仙丈が迫る。6：45分 塩見小屋。今年度、小屋は改装中で緊急、やむ得ない場合を除き営業を停止している。トイレ休憩中に小屋番のお

姉ちゃんとお話。小屋は28年改装オープンだそうで、大工さんはヘリで登り、下山は徒歩でということをお話してくれた。いよいよ塩見への登りだ。15分ほどで塩見の前衛岩峰を巻く。突然、眼前に塩見岳の岩峰がそびえ立つ。生徒は口々に「えー、ここを登るの」の声。はるか上部の岩壁に人が動くのが見える。このコースでの最大の難所。ここを登るために、7月の下旬、メインでの八ヶ岳合宿を組んだ。鞍部から慎重に登る。13名はやはり時間がかかる。一昨年の夏山、涸沢から奥穂・前穂・岳沢まで、10時間を要したことを思い出す。マー、登り始めれば思ったほどではない。しかし、ここで事故ればと思えば、生徒に慎重さを支持しながら高度をかせぐ。

編集子のひとごと

8月7日から11日にかけて滋賀県で行われたインターハイは暑い大会だった。ここ2年間悪天に見舞われたのとは裏腹の好天はありがたかったが、本部詰め役員としては、逆に熱中症などに気を使うまさに低山での夏ならではの大会となった。長野県から出場したのは男女アベックの松本県ヶ丘。男女ともに笑顔を絶やさない元気なチームだった。結果は、そろって19位ではあったが、健闘に拍手を送りたい。今大会からは「チーム行動」が大幅に取り入れられ、男女同一コース時差スタートなど、従来とは異なった運営が要求される今後の試金石となるような大会であった。「経費削減」と「競技化」の二つの側面からの改革であるが、いくつかの改善点や反省点もあったように思う。安全登山はインターハイ登山大会の生命線である。その観点で、11月の常任委員会では総括をして、来年度以降へとつなげていかねばならない。それにつけても、滋賀県関係者、とりわけ登山隊長の北村、総務の田中、辻のお三人の先生方には本当にお世話になりました。無事大会が終わったことを改めて感謝し、お礼を申し上げたいと思います。ご苦勞様でした。そしてありがとうございました。

さて、ご紹介したのは飯田高校の夏合宿の様子。お楽しみください。(大西記)